



子どもの見方を磨き 子どもの味方になる

最近よく見聞きする言葉です。子どもの「できない部分」ばかりに目がいきそうなとき、このステキな言葉を思い出します。

例えば、落ち着きのない子どもに対し、「また手遊びをしている」と見るのか、「手遊びしながらも頑張って着席している」と見るのかでは、子どもの姿が全く違って見えてきます。「手遊びで自分を落ち着かせながら、頑張って着席している」と肯定的に捉えることで、「手持ちぶさたにさせない工夫をしよう」「着席していればある程度の手遊びは認めよう」など、必要な支援や配慮が見えてきます。また、落ち着いている（できている）ときにこそ目を向け、良い姿を子どもにフィードバックするとともに、どんなときに落ち着いているのかを観察することで、「できる」ために必要な条件が見えてきます。

「できない部分」が目につき、うまくいかないと感じるときこそ、子どもの見方を変え、「できていること」に目を向けることが解決の糸口になるかもしれません。

巡回相談に行かせていただくと、「どうすれば落ち着くか」という質問が多々あります。落ち着かない理由は一人一人違うため、「こうすれば必ず落ち着く」という方法はありません。しかし、ある小学校で、担任の先生が「子どもたちの味方」になり、**うごき**を保障することで、複数人の落ち着かない子どもたちが上手く「生かされている」と感じる授業に出会いました。その工夫について一部をご紹介します。



落ち着かない子どもの味方になる

「**うごき**を保障する」

- 動きたい気持ちを利用して活躍の場をつくる
 - ・ 落ち着きがなくなりそうな子どもを意図的に指名し、板書や発表を求め、動きたい気持ちを生かして活躍の場をつくっていました。一般的に、落ち着きがない子どもは注意を受けやすく、成長過程で自信を失いがちです。動きたい衝動を皆に認められる行動に変え、自信をもたせる工夫をしていることが何よりもステキだと思いました。
- 一定のルールのもと、離席や離室を認める
 - ・ 集中の途切れた子どもが、先生に許可を求めて水飲みや手洗いを理由に廊下に出ていました。必要なときに動ける安心感からか、どの子もすぐ教室に戻り、肝心なときに集中を保って生き生きと学習していました。廊下に出るのはちょっと・・・，という場合には、解き終わった問題を先生に見せにいくようにしたり、配り係などを担当させて皆に認められる形で動けるようにするだけで、ガス抜きになります。

「**こころ**を短く明確にし、授業形態に変化をつける」

！時間の流れを視覚的に提示し、「ここまでやったら〇〇」「〇〇したら終わり」など短いスパンでゴールを見通せるようにして、集中が続くようにしていました。課題の途中に小休止を入れたり、活動場面（〇分計算、グループ活動、発表など）を多く取り入れたりして、テンポよく変化に富む授業展開でした。

「**きもち**がいい、肯定的な言葉で伝える」

「〇〇しません」より「〇〇します」の方が、何をすべきか伝わりやすく、子ども側も伝える側も気持ちがいいものです。否定的な言葉に子どもが敏感に反応し、不適切な行動を誘発することも避けられます。その先生は、子どもたちの前で否定的な言葉をただの一回も使いませんでした。つい否定的な表現になりそうな場面でも、「おいしい！」「ここまで頑張れたね」「〇〇さんの発表を皆に聞いてほしいな」など、肯定的な言葉に変換して伝えていました。一人一人を大切に言葉掛けのおかげで、学級全体に相手を認める雰囲気が育っていて、子どもたちが安心して学んでいました。